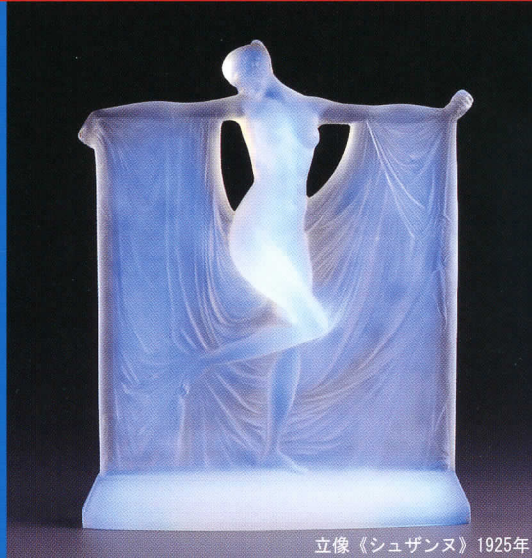


## 光への軌跡 ルネ・ラリック 展 2007年4月20日(金) ～6月3日(日)

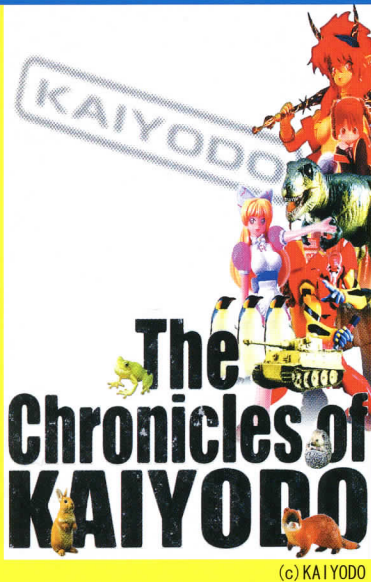


立像《シュザンヌ》1925年

両腕を広げて肢体を露わにする美しい裸体像。この《シュザンヌ》というガラスの立像は、ラリック65歳となる1925年に作られました。この頃よりラリックが好んで用いるようになったオパールセントガラスの作品です。オパールセントガラスとは正面から光を当てるとクールなブルー、向こうから光を当てるとオレンジ色に変化する、多様な表情をもつ不思議なガラスで、こうした光の変化が宝石のオパールに似ていることからこの名があります。この立像はジュディ・オングの曲「魅せられて」のようなポーズをしています。それを見る私たちは、神秘的な光のヴェールに包まれて、まさに「魅せられて」しまうことでしょう！

ガラス工芸の巨匠、ルネ・ラリックは1860年4月6日フランス北東部シャンパーニュ地方の小さな町アイに生を受けました。アイは豊かな自然とその恵みを活かした国際的シャンパンビジネスで名高い町。才能に恵まれたラリックのルーツがそこにあります。アール・ヌーヴォーのジュエリー制作者として一世を風靡した彼は、50歳を超えた1910年頃からガラス工芸に転向し、1910～30年代のアール・デコ期を代表するガラス工芸の巨匠として活躍します。小さな宝石に始まった光の表現は、やがてガラスを応用した大規模な空間の演出に行き着きました。世紀末のアール・ヌーヴォーと20世紀初頭のアール・デコ。宝飾工芸とガラス工芸。2つの時代、2つの分野で彼はまさに頂点を極めたのです。

光の美しさに惹かれ、その追求に一生を捧げたルネ・ラリック。彼の工房で生み出された作品の一つ一つに、ものづくりを心底愛して止まなかった彼の魂を感じるができるのではないのでしょうか。本展覧会では、ラリックが生み出したガラス工芸の魅力、代表作約180点により余すところなくご紹介いたします。めくるめく光の世界を心ゆくまでお楽しみください。  
[佐々木真理子]



(c) KAIYODO

皆さんは子供の頃オマケにつられてお菓子をねだった事、その箱を開ける瞬間のワクワク感を、覚えていますか？大人になってからは、コンビニに並ぶお菓子の中から出てくる精密な動物や妖怪等のフィギュアを思う存分集めた方もおられると思います。食玩とよばれているお菓子のオマケは、近年新しい文化として定着しつつあります。

そのブームのきっかけを作ったのが、今回紹介する「海洋堂」です。1964年に小さな模型店としてスタートを切った海洋堂は「創る楽しみを全ての人に」を創業当初のキャッチフレーズに、モノづくりの夢と情熱を持ち続けてきました。彼らの作り出すモノ達は、食玩なんて所詮おもちゃだろう、という今までの概念を覆し、フィギュアマニア以外の人々にも広く造形師の仕事を知らしめました。また、海洋堂の「オタク」達は塗装にもこだわり、小さいモノでも彩色工程が20～30色といったものも珍しくないそうです。

そんな彼らの仕事によって日本におけるフィギュアというジャンルが確立したと言ってもよいでしょう。美少女フィギュアやロボットそれぞれの名手、動物、恐竜の第一人者等々、個性的な造形師達のモノ作りに対するこだわりが、海洋堂のクオリティーを支えてきました。海洋堂が生み出した造形物からその時々のおたく文化のトレンドを読み取るのも面白いはず。子供の頃のドキドキした気持ちを思い出して、会場をのぞいてみませんか？  
[富岡洋子]

## 造形集団 海洋堂の軌跡 ～サブカルチャーと現代～ 2007年7月20日(金) ～9月2日(日)



カーマスコット《勝利の女神》1928年

# ■主な活動 2006年

- 9. 29-11. 12 ◆「イサム・ノグチ展」ギャラリートーク（会期中毎日曜・祝日、各日午前・午後、開催回数のべ17回、参加者数のべ496名）…A
- 10. 1 ◆しびの一と14号発行
- 10. 14 ◆秋の吉備路さすらい研修ツアー（吉備国際大学文化財総合研究センター：講師・大原秀之氏ほか/成羽町美術館：講師・渡辺浩美氏）…B
- 10. 21 ◆まるごと探偵クラブ「イサム・ノグチ探検記」アシスタント…C
- 10. 22 ◆子どものアトリエvol. 11「イサムさんと遊ぼう！」（講師：建築家・林幸稔氏）アシスタント
- 11. 23-12. 10 ◆「高松市美術館コレクション展Ⅰ 戦後日本現代美術のあゆみ」ギャラリートーク（会期中毎日曜・祝日、各日午前・午後、開催回数のべ8回、参加者数のべ98名）…D

- ## 2007年
- 1. 6 ◆香川県広報誌「THE かがわ」2月号による活動内容インタビュー
  - 1. 12-1. 28 ◆「高松市美術館コレクション展Ⅱ 東西芸術家の出会い」ギャラリートーク（会期中毎日曜・祝日、各日午前・午後、開催回数のべ6回、参加者数のべ64名）…E
  - 1. 27 ◆コレクション展Ⅱアートで遊ぼう！「5感でアートを楽しもう！」アシスタント
  - 1. 27 ◆西日本放送ラジオによる活動内容インタビュー
  - 2. 10 ◆5期常設展アートで遊ぼう！「讃岐彫と現代美術のフシギな関係！？」アシスタント
  - 2. 16-3. 25 ◆「ルートレック賛歌展」ギャラリートーク（会期中毎日曜・祝日、各日午前・午後、開催回数のべ14回）
  - 2. 21 ◆NHK米子およびNHK広島文化センターに対するギャラリートーク
  - 2. 22-23 ◆高松市立栗林小学校6年生5クラス受け入れ。各クラスを受け持ち、対話型ギャラリートーク。
  - 2. 25 ◆ワークショップ「ルートレックと遊ぶ」（講師：グラフィックデザイナー・U.G. サトー氏）アシスタント
  - 2. 27 ◆市政出前ふれあいトーク「アートで遊ぼう！」のアシスタント（高松市社会福祉協議会において）
  - 3. 4/11/17/18 ◆子どものアトリエvol. 12「影絵劇に挑戦！」（講師：人形劇団「ドリーム」メンバー河野美恵子氏）
  - 3. 18 ◆まるごと探偵クラブ「ルートレックのひみつを探せ！」アシスタント

### E 「高松市美術館コレクション展Ⅱ」ギャラリートークを終えて

ピカソ、マチスと並ぶ猪熊作品のご案内から、第2展示室での、変貌を遂げるNYでの猪熊と、本展はお楽しみ満載。こうした郷土の作家猪熊の他に、例えばゴッホに扮した森村泰昌の種明かし、私自身も呻吟（しんげん）したデュシャンの版画と、まだまだ驚きは続行。最後の部屋の蛍光塗料を使った田中重太郎の作品の前では、あまりのまばゆさに鑑賞者は目をパチパチ。着想の源がアメリカのケリーという作家になるシンプルな色面絵画だとご説明すると「なるほど」と納得されたよう。ご案内した私も大いに楽しんだ展覧会でした。トーク後見回した会場で目に入ったのは、ある作品を熱心に見入るご夫婦。きつと、オリジナリティを求めて模索した日本の作家の思いを受け止めていらしたのでしょ。

[高木由真子]

### A 「イサム・ノグチ展」ギャラリートークを終えて

現代彫刻家イサム・ノグチ。彼の創作活動は、彫刻だけでなくとどまらず、家具・舞台装置・照明器具・庭園・公園と、多岐にわたっています。多面的な活動で知られるノグチですが、彼を知るにつれ、「地球を彫刻する男」のフレーズが、彼の本質を表わす言葉としてふさわしいように思われてきました。石を地球の骨だと言ったノグチにとって、石を彫刻することは、地球の一部を彫刻すること。その作品は地を割り、根を張って、地中奥底にまで繋がり、引つ張られ、同時に天へも突き抜けて…。《夢窓国師のおしえ》《無限の連結》《下方へ引く力》等々。イサム・ノグチの彫刻には、あまりにも壮大な、彼独自の宇宙観が投影されているようです。トークのラスト《真夜中の太陽》では、そのスケールの大きさと、お客様の真剣さに圧倒されながら、眩暈にも似た感覚を味わいました。彼を語るには、まだまだまだまだ未熟者の私です。

「堀本真弓」



### B 「秋の吉備路さすらい研修ツアー」に参加して

十月一日秋らしい好天のもと、バスをチャーターしていざ出発。瀬戸大橋を渡り、最速の目的地である吉備国際大学までと一歩というところで、バスの前面に掲げられた「さすらい研修ツアー」の名前の横が、本当にさすらいしてしまいました！傾斜のある細い路をバスがバックするどきなどは、正直ヒヤヒヤものでしたが、何とか無事に到着。バスの運転手さんの絶妙のハンドルさばきが忘れられません。大学内の文化財総合研究センターにて、大原秀之先生方による美術作品についての興味深い説明を聞きながら、実際の修復現場を見せていただきました。さまざまな症状を抱えた日本画、洋画、彫刻などの一患者が、最新の科学技術と修復家の卓越した手わざのおかげで、見事によみがえり、持ち主のもとへと返って行く…こはさしずめ「美術作品の総合病院」といったところ。複数の作品の修復が同時に進められているのですが、そのなかに高松市美術館所蔵の草間彌生《無題（金色の椅子のオプティク）》と豊原《アダムとイヴ》を発見！退院して元気な姿を見せてくれる日が楽しみです。

次に訪れたのは、吉備国際大学の近くにある頼久寺というお寺。その中にある庭園は小堀遠州の手による傑作と称されていて、枯山水庭園の美しさに、時を越えた和の心を感じました。合掌。

そして最後の目的地、成羽町美術館へ。建物は「世界のあらゆる周りの風景と建物が一体化した」ともステキな美術館でした。開催中の特別展「巴里憧憬 エコール・ド・パリと日本の画家たち」も中身の詰まった面白い展覧会で、渡辺浩美学芸委員のトークと共に楽しいひと時を過ごすことができました。

秋の吉備路さすらい研修ツアー、スリルあり（迷子）感動あり（修復の現場、展覧会）癒しもあり（お寺）のすこぶる充実した内容となりました。このツアー、旅行パッケージ化したら当たるかも？

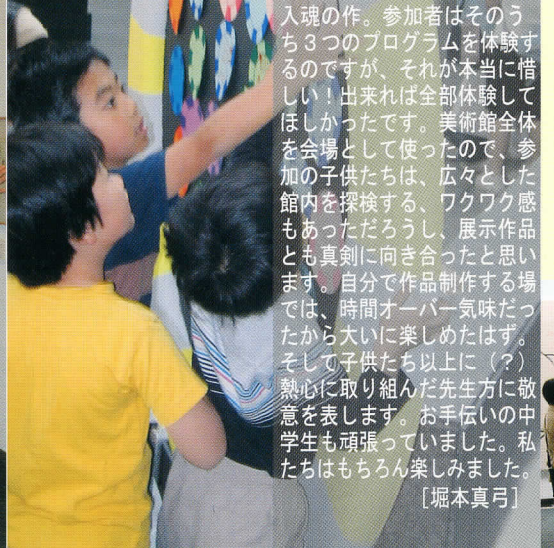
「佐々木真理子」

### C 「イサム・ノグチ探検記」アシスタントをして

今回は中学校の美術の先生方が中心になり、我々美術館スタッフと一緒に、イサム・ノグチ展に関連したプログラムをつくり、それに小・中学生が参加するというイベントでした。各プログラムは、クイズスタンプラリーなどの、展示会会場で行う鑑賞系2つと、講座室で行う、石などを素材にした作品制作系3つ、そしてイサム・ノグチの物語を、紙芝居風映像作品で鑑賞する、全部で6つのプログラムでした。どれも各担当者

入魂の作。参加者はそのうち3つのプログラムを体験するのですが、それが本当に惜しい！出来れば全部体験してほしいかったです。美術館全体を会場として使ったので、参加の子供たちは、広々とした館内を探検する、ワクワク感もあったらうし、展示作品とも真剣に向き合ったと思います。自分で作品制作する場では、時間オーバー気味だったから大いに楽しめたはず。そして子供たち以上に（？）熱心に取り組んだ先生方に敬意を表します。お手伝いの中学生も頑張っていました。私たちはもちろん楽しみました。

「堀本真弓」



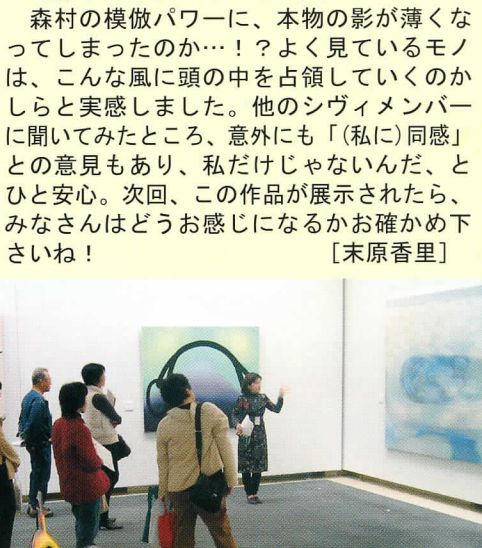
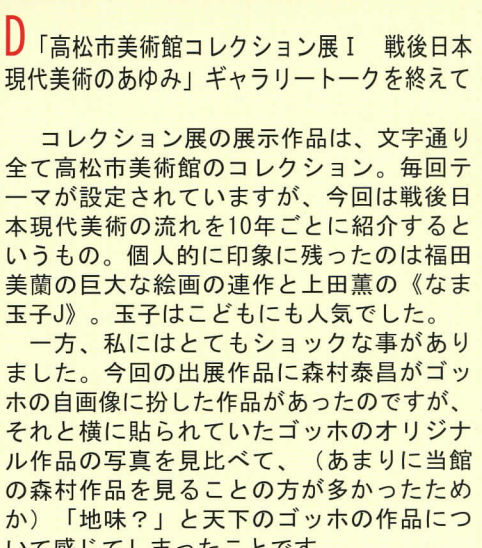
### D 「高松市美術館コレクション展Ⅰ 戦後日本現代美術のあゆみ」ギャラリートークを終えて

コレクション展の展示作品は、文字通り全て高松市美術館のコレクション。毎回テーマが設定されていますが、今回は戦後日本現代美術の流れを10年ごとに紹介するというもの。個人的に印象に残ったのは福田美蘭の巨大な絵画の連作と上田薫の《なま玉子J》。玉子はこれもにも人気がでした。

一方、私にはとてもショックな事がありました。今回の出展作品に森村泰昌がゴッホの自画像に扮した作品があったのですが、それと横に貼られていたゴッホのオリジナル作品の写真を見比べて、（あまりに当館の森村作品を見ることの方が多かったためか）「地味？」と天下のゴッホの作品について感じてしまったことです。

森村の模倣パワーに、本物の影が薄くなってしまったのか…！？よく見ているモノは、こんな風に頭の中を占領していくのかしらと実感しました。他のシヴィメンバーに聞いてみたところ、意外にも「（私に）同感」との意見もあり、私だけじゃないんだ、とひと安心。次回、この作品が展示されたら、みなさんはどうお感じになるかお確かめ下さいね！

[末原香里]



ここに紹介する画家、野見山暁治を私をはじめ知ったのは、十数年前のことである。野見山は、高松市美術館記念講演会の講師として招かれていた。当時、私は彼がどういった絵を描く画家なのかということさえ知らなかった。一九五二年にフランスへ渡り、一九六四年帰国。その後母校の東京芸大教授という経歴から、さぞや難しい話に勝るものでは、思っていたが、すぐにそれが私の勝手な思い込みであることがわかった。あけがらの勝手、飾らない、わかりやすい話を聞いているうちに、なんだか笑ってしまうのである。そんな野見山の人柄から、彼の作品に興味を持った。

《虚空》は、野見山がフランスから帰国する直前の四二歳頃描かれた作品である。くすんだ灰色を画面いっぱいに塗り込み、その上に黒、赤褐色の塊と図太い線によって、画面は断ち切られている。そこに描かれているのは、山、島、雲、煙、光、影、河、家：観る人によってありとあらゆるものにみえはしないだろうか。野見山は、自身の本の中でのこのようなことを言っている。「風景といながら結局は人間を描いているのではないかとも思う」（『野見山暁治の風景デッサン』）。画面の鋭角的な黒い塊は、彼の生まれ故郷である筑豊の原風景「ボタ山」や炭坑町のすすけたトタン屋根かもしれない。しかし、それ以上に彼の言葉どおり、自分自身の心象風景なのかもしれない。長野県上田にある「無言館」は、戦没画学生慰霊の美術館である。野見山は、遺作を集めるために、全国を訪ね歩いた。昨年、久しぶりに「無言館に込めた思い」の講演を聞く機会があった。彼のユーモアとあけつっぽるげな語り口は、八六歳になっても健在だった。



野見山暁治《虚空》1962年 油彩・麻布 88.5×146cm  
\*本作は2007年4月3日～6月10日開催の第1期常設展「空と大地」にて展示予定  
「鈴木典子」

ライターの  
ヤマトがま



私たちボランティアグループ、シヴィの活動は大きく分けて3つ—特別展のギャラリートーク、ワークショップのアシスタント、そしてこの「しびの一と」の編集。このうち活動のメインとなるのは特別展ギャラリートーク（以下、GT）ですが、このGTは果たしてどのような準備を経て行われるのでしょうか？またその過程での苦労や喜びとはどのようなものなのでしょうか？知られざるGTの秘密に迫りたいと思います。

井正美展展のこと。午前の案内を終え隣接する店であそびをすすっていたら、隣の中年男性から「先ほどはありがとうございました」。驚いてよく見ると、トーク中に質問をされたとしても熱心なお客様だ。何でも、趣味で漆塗りを習っていて、京都から早稲車とばしと友人と一緒に来館されたらしい。この後は親光もせげに京都（トノボ）帰りされること。お店でお別れするさいお路のご遺事祈念と感謝の案内で、深々とお辞儀をしてお見送り。私ごときの案内でよかったですのかと、責任を感じると同時に、「一期一会」を思った。（た）

トーク前、最終確認をしていたら、「あなた、ここで何しているの？」と知人から声をかけられ、一瞬にして云おうとしていた言葉を忘れてしまおうということがある。公の場の美術館、どなたが来られたとしても不思議ではないところで、平常心を失わないだけの作品の説明ができるように心がけたいと思っています。又、嬉しいことは、拙い説明にどうもなすいて下さって最後まで聞いて頂いたことです。又頑張ってみようかなと思える勇気が湧いて来るから不思議ですね。（み）

G「の準備は、まず展覧会オープンのおよそ1ヶ月前、担当学芸員の「レクチャー」から始まります。そこで展覧会の趣旨、構成、主な作品、GTをする上での注意点などを学びます。その後個々にカタログをはじめ様々な資料（文献、ネット、映画、音楽、展覧会など）で展覧会、作家、作品に対する知識と理解を深めます。この「勉強」の過程は孤独で苦しい作業に陥る場合も多々ありますが、皆で集まって情報を交換し合う「勉強会」の場を設けるなどして、楽しく勉強することができるよう努めています。そして準備の最終仕上げは、展示室でのリハーサルです。リハは閉館後の展示室で学芸員立会いのもと、作品を前にGTを通して行なのですが、静まり返った展示室で、時に学芸員からダメ出しをされるこのリハ、本番よりも緊張するというメンバーもいらっしやいます。でも、学芸員から裏話を聞かせてもらったり、みんなで作品をつぶさに観察して思わぬ新発見があったりなど、リハは何かと為になる、貴重な時間です。そして次は本番。「準備万端、さあかかってこい！」「みんな熱心に聴いてくれる、ああ嬉しい！」「作者の名前なんだったっけ？」「告知アナウンスを聞いたら胃が痛くなってきた！」「ええい、もう野となれ、山となれ！」…トークの内容と同じで、本番での本人の心境も様々なようです。

さて、ここでシヴィのベテランメンバーiさんにご登場いただき、GTにまつわるお話をいろいろとお聞かせいただきましょう。  
Q: iさんの場合は、調べていくうちに興味が深まった作家っていますか？  
i: 毎回そうです。調べていくうちに興味がそがれた作家はただの1人もいません。ただ、好きになることもあれば、好きでなくなった作家もいます。1本の蜘蛛の糸が繋がれて見事な模様を描くように、調べれば調べる程、複雑な人間模様が見えて来て、その蜘蛛の巣に捕われてしまいます。痺れて、蜘蛛の餌食になって死にそうになる事もあります。好きでも嫌いでも、作家の人間性に惹かれます。  
Q: 調べていくうちに作家本人への関心が高まっていくのですか？

はい。昔からロードトレックには捕われていて、顔も境遇も何も知らない頃から、絵が好きでした。先に絵に惹かれ、初めて作者の姿を写真で見たとき大変なショックを受けたのを今でも覚えています。「この人がロードトレック？！」と。で、残念なのは、それ以前の自分がどんな風にロードトレックが好きだったのか、その状態に戻れない事です。だから、今回は更に自分のロードトレックに対する思いを確認し、強める展覧会となりました。今は「好き」を超えてしまっ、一言で「好き」と言えません。  
Q: 複雑な心境ですね。GT中に、お客様から刺激を受けることもありますよね。忘れられない思い出があれば教えてください。  
i: トーク中、と言うわけではないのですが…「西アフリカの美術展」(2002年度)では、「昨日アフリカから帰って来ました。あのバクバ族の布買って来ましたよ」という素敵なご婦人がいらしたり、「アンテスとカチーナ人形展」(2004年度)の講演会の時、前列の若いハンサムな男性がカッコ良いTシャツを着られて、背中にデザインされた文字を読んだら「hopi」…講演会の後、どこでそのシャツを手に入れたのか聞こうと声を掛けたら、なんと「現地でホビ族と共にしばらく暮らしていた」！！という青年。これはただものじゃやない、迷ってはならぬと、別の部屋に連れ込み(?)、インタビューしたところ、その筋の研究をされている東京都立大の方でした。ホビ族の現状を聞いたら、「今はホビ族も携帯片手に…」と聞いてまたビックリ。その方にはその後、無理を言って研究論文まで送って頂きました。「セント美術館展」(2005年度)では、レオン・フレデリックの《告別の食事》、ある方が言うのです「この絵、弔われてる死者が同席してる」…背筋がゾクッ…まだまだありますが、これからもたくさんさんのゾクッを期待しています。  
なるほど。会場にお越しのお客様のお話も面白いですね。一人で過ごす美術館も良いけれど、GTをきっかけに、その場にいる人と一緒に感想を述べ合ったり、情報交換したりして、より深く作品と向き合えると楽しいですね！ぜひGT未体験のお客様にも知っていただきたいです。シヴィによるGTは、特別展会期中の日曜/祝日11時、14時から。いっしょに感動を分かちあいませんか？  
[末原香里]

シヴィが明かす！  
ギャラリートークでの  
失敗した話 感動した話

初めてのトークのときの話。あがりにはあがった私は自分の位置がわからなくなり、あろうことか、お客様を展示室に投げた状態でご案内しようとした。あそこにはリフトとガラス越しの景色しかないんですよ。（た）

人が近づくとセンサーが感知し、プロペラが回る立体作品をご案内したときのこと。「どうぞ、こちらへ」とお客様にセンサー感知位置まで誘導したのはいいが、小さいのは回るの一番大きなプロペラが動かない。とっさに「どうしたのですか、プロペラのご機嫌がさようは悪いようですね」。トーク後、「この先輩がさようは悪いようですね」。プロペラは最初から動かない設計なのよ！大ウウウについてしまいました。どうもすみません！！（た）

セント美術館展だっと思えます。トークが終わってホッとした時に、一人の女性が寄ってこられました。彼女曰く「今のお話は、図録の解説文を読めばわかる内容ね。お客様がせっかくなら集まっているのだから、彼らから意見を引き出し、議論できるようにすればいいと思う。あなたはさうだったわ」。対話型ギャラリートークの薦めだったのですが、いきなり言われて私の目はテンに凝るばかりでした。いつか対話型トークができたらいいなあ。夢。（は）

トーク終了後あるお客様から、「次トークするときは「えーと」「あーの」の数を十回以下にするように」とキツイだめ出しをもらったことが！（ま）

2007年1月27日(土) コレクション展Ⅱアートで遊ぼう! 「五感でアートを楽しもう!」

小学校中・高学年を対象にした鑑賞講座「アートで遊ぼう!」。定員15人の和やかな雰囲気、学芸員自らが担当する展示の作品を素材に毎回創意工夫を凝らしたアートゲームや、作品作りのユニークさから、毎回参加の「常連さん」も増えつつあります。1月27日(土)のテーマは「五感でアートを楽しもう!」。2階展示室で開催中のコレクション展「東西芸術家の出会い」担当の牧野学芸員が、7人の子どもたちを相手に講義を務めました。

まず五感の説明から。お菓子のチョコパイを配り、まず見て(=視覚)、触って(=触覚)もらい、口に入れたところで甘い香り(=嗅覚)と味を楽しんでもらい(=嗅覚・味覚)、サクサクという音も聞いて(=聴覚)もらい、5つの感覚を味わってもらいます。そしてふと見ると牧野さんの横には展示台の上に置かれた人形が。「ふつう、美術館では『見る』ことによって作品を鑑賞するわけですが…」と語りかけながら、おもむろに背中スイッチを入れると、突然人形が音とともに動き出しました。「現代美術では、時には動いたり音を立てたり、香りのする作品も見られるわけです。」なるほど。

その後、展示室に移動していくつかの作品を鑑賞。絵具に砂を混ぜて質感を際立たせた猪熊弦一郎《ジブシーの子供達》、「フロッタージュ(捺り出し)」の技法で空想の動物や植物を描いたマックス・エルンスト《博物誌》、小箱の中の品物を小穴から差し込んだ指先で「感じる」贅囀(あいおう)《フィンガー・ボックス》などなど。実際に触れはしないものの、五感に訴える作品の数々を鑑賞。

講堂に戻って、壁の凹凸を鉛筆でコピー用紙に捺り出して「フロッタージュ」の体験。扇風機の回転軸に固定されて回る厚紙におそろおそろ鉛筆を近づけて同心円づくり。我も我もと順番待ちの列ができました。「うちでは一人でしないように。」と牧野さん言うてたけど、絶対しよるで…と思いつながら参観。最後はオリジナル版フィンガー・ボックスの制作と中身当てゲームで締めくくりました。嗅覚や味覚がヒントになる調味料や飴玉などよりも、子どもたちに人気があったのはビー玉やビーズといった玩具類。素材の選択肢が10数種類と限られていたところに、時間内に収めようとする大人たちがちょっと急かすぎたかな?と終了後の意見交換会での反省の弁もあつたものの、「五感」をポイントに楽しく現代美術の鑑賞を体験できたひとときとなりました。[高松市美術館学芸員 山本英之]



2007年2月22日(木) 空気砲パフォーマンス“DON!”炸裂!

エントランスホールに謎の物体出現!大砲らしきもの、スピーカー、扇風機などからなる、この幅10メートル近くある黒い巨大な装置は、アーティスト牛大伍氏の作品《DON!》。地域創造主催によるホール・美術館職員向けセミナー「アートミュージアムラボ 高松セッション」のプログラムの一つとして、この日の18時からこの《DON!》の実演が行なわれたのです。オレンジのつなぎとアフロヘアでクールに決めた牛氏は、18時になるとおもむろにパソコンのキーボードをたたき装置に指示を出します。するとゴーという地響きに似た低いなり声のような音がスピーカーから発せられます。そして牛氏によってガスが大砲に注入され、しばらくすると「どん!」という轟音とともに閃光を発生した大砲から煙の輪が発射されます。この発射は一定のリズムで続き、その音の連続は

まるで単純な旋律が反復されるミニマル・ミュージックのよう。そして時おり、真ん中にある「超特大砲」から巨大な煙の輪が!これは発射前に「キュ〜〜」という音がするので、観覧者は一同「来るぞ、来るぞ」と胸を高鳴らせず。煙の輪は触ると目の前に崩れてしまい、迫力のわりにはなんとも威力のない大砲です。パフォーマンスは20分くらい続き、終わったときには会場は煙だらけ。観覧者にはもちろん大好評で、拍手喝さいです。暗い中、煙と光と音を体全体で感じる作品なので、終わったあとの感覚は、ハードロックのライブを聴き終わった時に似ているかもしれません。ちなみに、当日の昼間、団体鑑賞で訪れた小学生たちから「どうしても気になる」といわれ、特別に実演をしようというので、小学生たち、どんな反応をしたのでしょうか?赤ちゃんやお年寄りの反応も見たいものです。[高松市美術館学芸員 牧野裕二]

2007年2月25日(日) ワークショップ「ロートレックと遊ぶ」

「ロートレック賛歌」展出品作家でもあるグラフィックデザイナー、U・G・サトー氏を招き、好きな「有名人」のポスターをつくるワークショップを行ないました。小学1年生から年配の方まで、参加者は事前に描きたい有名人を決めており、制作に必要な材料(有名人の写真など)も持参しています。サトーさんが一人一人描きたい有名人を聞くと、イチロー、松井秀喜、オードリー・ヘップバーン、仲間由紀恵、宮沢賢治など、お気に入りのスターたちの名前が並びます。描き始めると、サトー氏はそれぞれの机をまわり、作品を見ながら、ポスターを作るうえでのテクニックを伝授していきます。途中、ポスターの

「お手本」を見るために皆で展示室へ行き、ロートレックへのオマージュとして制作された現代のポスターのコーナーでは、ご自身の作品のほか、親交のある作家たちの作品を「辛口」で批評してくださり、参加者を楽しませていただきました。開始から4時間ほどが過ぎ作品が仕上がると、発表会です。試行錯誤のすえ完成した力作ぞろいですが、個人的には小学1年生による、新聞広告の松井秀喜の写真に布をコラージュした作品が印象に残りました。細かく切った布をモザイクのように組み合わせることで、肌の質感が巧みに表現されているのです!続けて、サトー氏の作品の紹介もあり一同、美しくもユーモアに満ちた独自の世界に引き込まれ、ワークショップは盛況のうちに終了となりました。[高松市美術館学芸員 牧野裕二]



左からイチロー、中田、松井。

私達と鑑賞を一緒にしませんか?

美術館ボランティア「civi(シヴィ)」によるギャラリートークは特別展会期中の毎日曜日および祝日の午前11時〜午後2時〜1日2回、2階展示室にて行います。

各品目作家などの知られざるエピソードが聞けるかも?

発行:高松市美術館  
編集:civi デザイン/編集:牧野裕二(高松市美術館)  
高松市美術館  
760-0027 香川県高松市紺屋町10-4 電話 087-823-1711

編集後記

- ルネ・ラリック展の原稿作成中に娘がプレゼントしてくれたガラス製ビーズのネックレス。それは彼女が心をこめて作ってくれた物。「ビーズ」という言葉は彼女いわく「祈り」を意味するとの事。そんな神聖なアクセサリーだったなんて!8歳の娘は時々私の先生になりませう。[佐々木真理子]
- 昨年は「JUDON」やイサムノグチ展、直島のスタンダード展など、香川が大注目の1年でした。今年は、夫や子どもと一緒に、香川の名所を訪れたいです〜 [末原香里]
- civiが見た!のコーナーで野見山暁治さんの作品を取り上げたけど、昨年講演を聴きに行ったとき、突撃インタビューすればよかった。ああ〜後悔! [鈴木典子]
- 特別展に比べてコレクション展は来場者が少なめという印象だったが、2月のコレクション展Ⅱではギャラリートークを聞いてくださるお客様がたくさんいて嬉しく思った。企画が楽しかったせいもあるんだが、丸亀町の再開で人の往来が増えたとはいふまでもなく秘かに思っている。ショッピングのついでにふらりと街の美術館へ、という方がもっと増えるといいなあ。[高木由貴子]
- 先日夕々に訪れた秋葉原は、メイド服のお嬢さん達や、沢山の外国人で賑わっていました。やっぱり、新たな日本文化の発祥地はアキバなのでしょうか? [富岡洋子]

- 「コレクション展」のおかげで、現代アートがとても好きになりました。やっぱり、「今」を表現しているものが面白い!!印象派第一主義を引っ込めます。[堀本真弓]
- しびの一とは、ボランティアグループ・シヴィと高松市美術館と美術館のものに多くの人が興味を持ち、親しんでもらいたい、という願いから2000年に創刊され、今回で15号を迎えました。活動報告だけではつまらない、読み物としても面白いものを、という方針で編集してきましたが、最近の記事は「高松市美術館の」「ボランティアである」「シヴィ」が発信するメディアとしての必然性がやや薄いと思われるものが見受けられましたので、今回は、活動報告のボリュームを増やし、ギャラリートークの裏話的な記事も掲載してみました。これからも「シヴィならでは」の話題づくりのために試行錯誤したいと思ひます。[高松市美術館学芸員 牧野裕二]
- まるごと探偵クラブ第3弾「ロートレックのみつを探せ!」(3/18日開催)、香東中学校美術部とリンクした今回の活動も魅力あふれるものとなりました。シヴィの有志に下記感謝状を!「あなたは高松市美術館において開催される子ども向けプログラム「まるごと探偵クラブ」において、柔軟な発想とあふれる情熱、そして果敢な実行力で毎回参加者を楽しませイベント成功を導くと共に、鑑賞教育発展のために大いに尽力されました。よってその功績と楽しみ方のあなたらしさに対して深い感謝と美術館活動を通してあなたと出会えたことの喜びをお伝えします。」[高松市美術館学芸員 毛利直子]